

ドキュメンタリー映画『がんと生きる 言葉の処方箋』 マスコミ試写会

中山 秀一



挨拶と質疑応答に応じるスタッフ。左から広報担当：執行啓昌氏、福井県済生会病院・集学的がん診療センター長：宗本義則氏、監督：野澤和之氏。

表記ドキュメンタリー映画のマスコミ試写会が3月19～20日の2日間、銀座のTCC 試写室で行われた。この作品は、新宿武蔵野館で、5月3日初日のモーニングショー（トークイベント開催）を皮切りに、順次全国ロードショーが始まる。

野澤監督初期の作品に『マリアのへそ』があり、2007年のSKIPシティ国際Dシネマ映画祭にノミネートされている。惜しくも受賞は逃したが、筆者には強い印象として今でも脳裏に焼き付いている。

この作品はフィリピンの首都マニラで、路上生活をする父子4人家族を、マリアという6歳の少女を主役に、暖かく描いた作品だ。特筆すべきは、実際の路上生活者たちを、役者として演技をさせ、ドラマとして物語を綴っていることである。これはドキュメンタリーとドラマの融合とも言える、新しいジャンルの映画だと思う。

以来、野澤監督は、一貫して弱者の側に寄り添う映画を製作している。今回の作品は、がんを宣告された人たち、治療中の人たち、治療から見放された人たちに、心の支えとなる支援の活動を描いている。

この活動組織「メディカルカフェ」は、いま全国に広がり、150か所にも及ぶとい

う。がんと診断される人は年間100万人を超えており、今後ますます「メディカルカフェ」が必要になると言われる。

この「メディカルカフェ」の生みの親は、順天堂大学医学部・病理腫瘍学教授 樋野興夫先生である。先生が学内に「がん哲学外来」を開設したことから、それを発展させて「メディカルカフェ」を提唱している。

福井県済生会病院 集学的がん診療センター長の宗本義明先生も《新しい素晴らしい人生を考える「言葉の処方箋」》を提唱して「メディカルカフェ」に協賛している。

この映画は「メディカルカフェ」に賛同する4人の代表たち自身が、がんと共生しながら活動する姿を紹介する。そして会員たちとの交流により、全員が心の安らぎを得るようすが描かれる。

「言葉の処方箋」とは「使命感があれば寿命は延びる」「がんも病気も単なる個性である」「解決はできなくても解消はできる」



等々、前向きな言葉である。

「メディカルカフェ」のリーダーたち4人を密着取材しているが、どのリーダーも自身が、がんを背負っているのに、明るく自然体であるのが、観る側にも安らぎを感じさせる。

この作品は、出演者のコメントと会話だけで進行する「ノーナレーション」を採用している。したがって収録現場の環境によっては、反響で音声聞き取りづらい。作品の内容から見ても「日本語字幕」を入れてバリアフリーしてもらいたい。

Syuichi Nakayama
日本映画テレビ技術協会名誉会員